2019 年度東広島市教育委員会主催・広島大学マスターズ共催市民講座

「小学生のための実践的な将棋講座」実施報告

広島大学マスターズ会員　早瀬光司

平成 31 年の 7 月 30 日、8 月 6 日、20 日、27 日の 4 回にわたって、「小学生のための実践的な将棋講座」を開講させていただきました。

定員 10 名で募集をしましたが 14 名の小学生から応募があり、4 名だけ落とすのは忍びないので 14 名全員（6 年生 2 名、5 年生 3 名、4 年生 3 名、2 年生 4 名、1 年生 2 名）を受け入れました。まず、第一回の 7 月 30 日（出席者 12 名）には、机 6 枚を長方形の形にして並べ机一つに 2 名ずつの小学生が長方形の外側に座り、早瀬が長方形の内側に入って 12 名全員に対して早瀬が順繰りに指して回る将棋の多面差し対局を行いました。最初に詰将棋の問題をやってもらって小学生各自のおよその棋力を知ったのち、各自の棋力に合わせて（日本将棋連盟から五段を認定されている）早瀬が駒を落とす、10 枚落ち、8 枚落ち、6 枚落ち等の駒落ちの手合いで対局を行いました。駒落ちの将棋では、早瀬を上手（うわて）と呼び、小学生を下手（したて）と呼びます。

早瀬は小さい頃から将棋を指してきましたが、全 4 回を通して 12～14 名の小学生と指してみて思ったことは、みんな一所懸命に真剣なまなざしで将棋を指そうとしていたことでした。こちらも真剣に対応し勝ち負けは色々でしたが、この時早瀬は初めて「負ける喜び」を感じました。それは早瀬は上手として駒を落としているので下手の小学生にとっては勝てる可能性が大きくなってはいるものの、それでも小学生が上手に対して勝ち切ることは容易ではないからです。そういった状況において上手が緩めない手を指し続けても、下手としての好手（ほぼ最善手）を自ら考え出して早瀬を負かしてくれる小学生が出てくると、それを嬉しく感じる自分がいて興味深く思われました。

また、対局が終了したのちには必ず感想戦を行いますが、途中の局面を再現して「この局面ではこのように指した方が良かった」というような手を指摘して、今後の参考にしてもらいます。そして第二回、三回以降には、前回に勝った小学生には駒落ちの数を少なく設定します。そうすることによりその小学生にとっては前回よりは勝ちにくくなるので、彼らは棋力を高めようとする方向に努力ないし励むことになります。例えば、第一回には 6 枚落ちだった子が、第四回には 2 枚落ちの手合いにまで棋力を伸ばした 5 年生もいました。

振り返ってみると、第一回のときは早瀬にとっては生まれて初めての将棋の多面差しでした。そういう状況もあって、12 名全員に即座に対応し続ける対局を 1 時間以上続けたことで、第一回の講座が終わった後には体は文字通り疲労困憊の状態でした。ただ、体は疲れていましたが、小学生が皆一所懸命に将棋を指し真剣に頭を使ってくれたので、気持ちとしては、とても「うれしい心持ち」で満たされていました。

なお、将棋とは、頭の中で**緻密に**考えることを具現化した知的形態です。そして、人間の思考力を向上させる素晴らしい道具、手段、方法であると認識しています。今回、実際に小学生と将棋を指してみて、また、彼らの熱心な姿勢や思考力の発達を目の当たりにしてみて、「深く考えようとする力」及び「人を成長させる力」など将棋の持つ潜在的な力の大きさを、あらためて強く再認識させられた（楽しい）将棋講座でした。